

2-03 不器用さを有する年長児に対して短縄跳びに焦点を当てアプローチした一例

○倉 昂輝(OT)

医療法人社団 みなとのこども診療所

Key word : 発達障害, 協調運動, 事例研究

【はじめに】発達性協調運動障害(以下 DCD)とは、明らかな視覚障害や神経疾患がないにも関わらず、不器用さを示す神経発達障害である。短縄跳びは、幼児教育において身体づくりの観点から取り込まれることの多い遊びである。しかし DCD 児では、困難さを示す例も多く当院で相談される主な活動の1つである。本報告は、短縄跳びに焦点を当てた取り組みが試行回数の向上に繋がった事例を報告する。本報告の趣旨を十分に説明し、口頭及び書面にて家族の同意を得ている。

【対象・方法】

対象：5歳11ヶ月男児。注意欠如・多動症、発達性協調運動症。新版 K 式発達検査(4歳6ヶ月時)全領域：93。姿勢・運動：上限通過。認知・適応：91。言語・社会：96。日本語版ミラー幼児発達スクリーニング検査(以下 J-MAP)総合点：21(注意域)、基礎能力：1(危険域)、協応性：14(注意域)、言語・非言語・複合能力(標準域)。子どもの行動チェックリスト(以下 CBCL)総得点：29(境界域)、注意の問題：9(境界域)。その他：標準域。

方法：外来作業療法を1回2単位、2週間に1回、全12回、半年間に渡り実施した。短縄跳びは、聞き取りにて対象児及び保護者からの主訴として挙げられたことから焦点を当て取り組んだ。

近年、DCD 児に対する作業療法では、Cognitive Orientation Daily Occupational Performance (CO-OP) の効果が高いことが報告されている(Blank, R, 2019)。本介入では CO-OP の基盤となる課題指向型アプローチ(Preston, N, 2017)を参考に短縄跳びへの介入を実施した。

【経過】短縄跳びに関する介入は、作業療法2回目から8回目までの期間に実施した。初回評価における前回し両足跳び(1回縄を回す毎に1回跳ぶ)の連続回数は、約1, 2回であった。連続の前回し両足跳びを困難にしている要因は、体軸を正中線上に固定した上での四肢の対称操作困難、上腕部固定し前腕部および手関

節操作による縄操作困難、同一リズムの跳躍保持困難と考えた。

介入初期には、運動課題の一部分を取り出して実施した。具体的には、①トランポリン上にて同一リズムの跳躍 ②跳躍しながらのボール投げによる上下肢の協調運動 ③片側上肢を用いた縄跳びの回旋動作による前腕及び手関節の操作性向上を目的とした活動等を実施した。実際の短縄跳び動作では、鏡を使用した視覚フィードバックの利用や跳躍位置に目印をつける視覚支援等の難易度調整を実施した。介入中期では対象児の希望により後ろ回し両足跳びにも取り組んだ。

【結果】作業療法内による前回し両足跳びの連続跳躍は18回が最高記録だった。保護者からの語りでは、「幼稚園のなわとび大会で後ろ跳びを28回連続で跳ぶことが出来て周りから凄く驚かれた」と報告が聞かれた。J-MAP 総合点：36(標準域)、基礎能力：30(標準域)、協応性：14(注意域)、言語・非言語・複合能力：標準域。CBCL 総得点：23(標準域)、注意の問題：4(標準域)。下位項目では「注意が持続しない」、「行動が幼い」、「不器用」に改善が見られた。

【考察】DCD 児に対する課題指向型アプローチにより短縄跳びの試行回数向上、J-MAP および CBCL の改善を認めた。(Ravie, G, 1993)は、運動課題を単純な動作から複雑にすること、動作を部分的に分けて取り組むことの有効性を示している。本事例においては、対象児に合わせて難易度の調整及び動作を分解して取り組んだことが施行回数の向上に繋がったと考える。また(平井博史ら, 2018)は、縄跳びが上手く出来ない子は、「指導してもやる気がでない」、「諦めて他の遊びをしてしまう」ことを報告している。本事例では、対象児の「縄跳びが上手に跳べるようになりたい」という動機付けが課題指向型アプローチの基盤となる主体的な活動の取り組みを促し縄跳び大会における結果へ繋がったと考える。